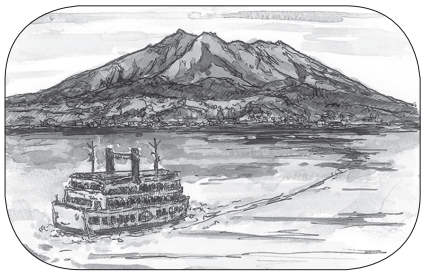
令和５年11月20日発行
通巻　第 542 号　11月号



令和５年度

鹿児島の教育

11月号

巻頭言

「校長職としての楽しみ」の発信

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会特別支援学校長部会副部会長
県立武岡台特別支援学校長
濵崎　信一

いつか校長になりたいと思って教職に就いた人がいるだろうか。誤解を恐れずに言えば、校内におけるまとめ役としての学年主任や部主任を経験し、その先の役割としての教頭職や校長職を務めている人がほとんどであろう。

ジブラルタ生命保険株式会社による「教員の意識に関する調査二〇二二」で、教員になりたいと思った理由は、「尊敬する教員・憧れる教員に出会ったから」が最多であった。また、生まれ変わったら就きたい職業については、「教員」が第一位で、次に「医師」や「大学教授・研究者」が続いていた。教員の長時間勤務や処遇改善等が問題になっている中ではあるが、この調査結果は、教職に魅力を感じていることの表れであり、うれしいことである。

さて、自分の教職の志望動機は話せるが、管理職についてはどうか自問してみた。管理職任用標準試験受験の際、尊敬する教頭や校長がいなかったわけではないが、自分に与えられた業務を効率よく行えるように、より広い視野を身に付けたいということが主な理由であった。

県教委においては、本年度、高校生のための「先生になろう相談会」など教員の魅力発信の取組が進められているが、近い将来に管理職となる後進のいる自分の職場において、管理職の魅力発信を少しでもしているかというと「イエス」とは言えない。任用標準試験の受験者も合格者数も年々減少しているが、管理職の大変さだけを見て、あるいは見せられて、希望者が限られてしまっていることはないだろうか。

ところで、令和三年度全国公立学校教頭会の調査によると、教頭職のやりがいの第一位は「教職員の育成」で、次に「職場の人間関係づくり」が続いている。校長職のやりがい調査があれば、「自分の理想とする学校づくり」が最多となると推測されるがどうだろうか。当然、校長としての教育の理想像は、毎年度、目指す学校像や経営方針として職員に伝えているが、校長職のやりがいや魅力については、教頭との間においてもこれまで語る機会は多くはなかったように思う。

校長としての年数も歩いてきた経歴も、現任校の地域や規模もそれぞれ異なる校長同士で、抱えている課題やその解決策だけでなく、時には校長職としてのやりがいや魅力を語り合い、共有し、「校長職としての楽しみ」として後進に発信していくことも、教職の魅力発信と同様に求められてきているのではないだろうか。

令和５(2023)年　11月号
一般財団法人鹿児島県校長会館
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13
振替 02030-1-3192
TEL 257-9676 FAX 257-9679
㈲　アート印刷
鹿児島市東坂元二丁目29-1
TEL 247-1605 FAX 247-2844

＊おもな内容＊

巻頭言 …… 1
随想 …… 2
提言 …… 3
わが校の学校経営 …… 5
子どもが輝く教育 …… 7
心に残るひとこと …… 9
ある日の校長講話 …… 12
話のひろば …… 14
読書案内 …… 16
趣味・文芸 …… 18
郷土の紹介 …… 19
一般㈶県校長会館だより …… 20
編集後記 …… 20

随想

希望の火種であれ

株式会社 musuhi　取締役　大岩根　尚

AM三：二三
眠れずにいる。
私の孫のまた孫が、夢で私に問いかける。
地球が壊れていこうとしているときに、あなたは何をしていたの？
右記は、グッド・アンセスター『わたしたちは「よき祖先」になれるか』という本の冒頭にある、ドリュー・デリンジャーの詩の引用だ。
今年の夏を振り返ると「暑かった」という感想を持たれる読者が多いだろう。それもそのはず「今年の七月～八月は過去十二万年で最も暑い二か月間だった」という報告が欧州の研究機関から発表され、これに輪をかけて九月は「完全に常軌を逸する」と表現されるほどの暑さだった。地球は現在、気候変動が激化する方向へと確実に向かっている。
気候変動の体感としては、長い時間をかけて少しずつ暑くなってきているという印象の方も多いだろうが、実はこの変化はこのままゆっくりとは進まないと研究者たちは予測する。気候変動は、大気や海や生態系など様々な要素が影響しあって変化する複雑なシステムの挙動の結果だが、ある閾値を超えるとシステムの様相ががらりと変化する。
その閾値は、産業革命前から比較した気温上昇の幅が1.5～2.0℃の間にあり、その温度を超えると気候システムの様相が変化し「灼熱地球」と言われる状態へ進んでしまうとされる。そうなると数十万年は回復しないと指摘する研究者もいる。酷暑だった二〇二三年九月の単月での気温上昇の幅は1.8℃。私たちは既に、閾値を踏み超えかけている。冒頭の詩にあった「地球が壊れていこうとしている」というのはオーバーな表現ではない。
その先の地球はただ暑くなるだけでなく、豪雨や干ばつなど様々な気象災害の頻度と程度が増加し、農水産物の不作や疫病・病害虫の蔓延、それに起因する飢餓、水や資源をめぐる紛争など、様々な困難が想定されるディストピアだ。研究者や国連や政府もその解決策や答えを知らない想定外の困難が、同時多発的に発生する。そこへ向かう現状からよりよい未来を切り開くために、私たちは児童生徒たちに何を伝えられるのだろうか。不幸にも灼熱地球に向かうこととなったとき、想定外に対処し未来を拓くことを、どう伝えられるのか。
弊社の仲間たちが「かごしま探究プロジェクト」というチャレンジを始めている。地元企業のリソースと鹿児島のリソースを掛け合わせ、鹿児島をより良くするイノベーションプランを練り上げ、最終的に複数の学校と企業が集まってプレゼンテーション大会をするという一連の授業だ。学校、生徒、企業、教育委員会、そして運営する我々の全者にとって初めての試みで、想定外の連続だ。全員が想定外の最中にあっては誰も「教える」ことはできない。しかし、全員が学びながら進む探究の中に、変化が生まれ始めている。鹿児島だからこそのプランが生まれつつあり、生徒や教員、企業の担当者の目が輝き始めている。
この大きな、そして確実な変化の根源は、こういうプロジェクトを鹿児島で立ち上げたいと言った担当者の熱意だ。彼の熱意が火種となり、それが伝播し、各校、各企業の火種となり、その火が生徒たちにも移り始めている。
気候変動や感染症の蔓延は、大きな禍いとして私たちの将来にのしかかる。しかし、これらは国家を超えて人類全体が協力し合うことや、美しい自然環境を取り戻すことを私たちに求めるものでもある。紛争や環境破壊の絶えない地球にあって、これは大きな希望だとも言える。想定外の困難を乗り越える原動力は、希望を信じ抜き「今までどおり」を越えて進む意思だ。地球が壊れかけている今だからこそ、我々の一人一人が、常に希望を信じる火種として教壇に立ちたい。

略歴
二〇一〇年　東京大学大学院博士課程修了
二〇一一年　国立極地研究所　特任研究員
二〇一三年　三島村役場　地球科学研究専門職員
二〇一七年　合同会社むすひ　代表社員
二〇二一年　株式会社musuhi　取締役

『「教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策（提言）」を踏まえた取組の徹底等について（通知）』を受けて

串良小（隅）　枝田博教

令和五年九月の通知を受け、働き方改革の視点からの私見として提言する。

まず、「基本的には学校以外が担うべき業務」について考える。

一　登下校に関する対応

通知どおりに、交通指導の全てを学校以外の誰かに任せることは非常に難しい。現時点では、開門を遅く設定することや地域と話合いを重ねて協力を得ていくしかない。

二　放課後から夜間などにおける見回り、児童生徒が補導されたときの対応

警察の理解のもと保護者への連絡を第一にすべきである。ただし、対応できない保護者がいるときは学校が対応するしかない。

三　学校徴収金の徴収・管理

改善するには、事務職員の協力だけでなく給食費等の公会計化の推進が必須である。

四　地域ボランティアとの連絡調整

改善するには、学校と地域学校協働活動推進員との連携強化が必須である。

次に、「学校の業務だが必ずしも教師が担う必要のない業務」について考える。

五　調査・統計等への回答等

通知では事務職員の関与が促されているが、大きな改善にはならないと考える。改善するには、県及び市町村教育委員会の調査方法の見直しと工夫・改善が必須である。

六　児童生徒の休み時間における対応

改善するには、各校への教育業務支援員の多数配置や防犯カメラの設置等が必須である。

七　校内清掃

改善するには、清掃の隔日実施やワックスがけやプール掃除の外部委託が必須である。

八　部活動

改善するには、地域と連携し地域活動への移行及び部活動指導員の確保が必須である。

最後に、「教師の業務だが負担軽減が可能な業務」について考える。

九　給食時の対応

改善するには、教師を支援する教育業務支援員の各校への配置が必須である。

十　授業準備

改善するには、印刷や道具の準備等を行う教育業務支援員の配置が必須である。

十一　学習評価や成績処理

教育業務支援員の補助が必須である。

十二　学校行事の準備・運営

学校行事の見直しや時数の大幅削減、週時間数の削減等が必須であるが、削減に関しては学力向上の視点からの議論も必要である。また、学校行事削減は、児童生徒の人間関係形成・社会参画・自己実現の場を失う弊害があることも理解すべきである。しかし、学校側の精選は限界にきている。改善するには、市町村教育委員会が企画・実施している各種行事の検討が必須である。さらに、時数削減に関して、本県が実施している第二土曜日の授業についても検討すべきであると考える。

十三　進路指導

改善するには、各校への支援スタッフの配置が必須である。

十四　支援が必要な児童生徒・家庭への対応

改善するには、不登校対策に重要な役割を果たすSSWの各校への配置と勤務日の拡大及びSCの学校訪問回数を増やす等の人員と予算の確保、授業を持たない生徒指導担当職員の各校への配置等が必須である。

本校では、これから校時表の改定を行い、週当たり一時間超の時間確保ができるようにしていく。小さな一歩だが、通知の具現化の一つと捉えている。

この提言は、あくまでも通知を受けた私見である。県及び市町村教育委員会においては予算と人員確保を、各校では話合いを重ねた具体策が実現されることを願っている。

教師としてのやりがいと教職の魅力

鹿児島聾　東　みゆき

一　はじめに

文部科学省は、令和三年度、「教師不足」に関する実態調査を行っている。（令和四年一月三十一日公表）教師不足については、「見込み数以上の必要教師数の増加」や「臨時的任用教員のなり手不足」の二点が主な要因として示されている。教師を志す人たちが減少している状況は、現職にある我々にとっても一大事である。ここでは、教師志望者数を増やすための方策として、学校教育現場から発信し得る三つの魅力について提言する。

二　学び続けることのできる魅力

教育基本法第九条には、教員の研究と修養に関することが規定されている。教師の本分は、学習指導と生徒指導の充実を図ることであると捉えているが、私が勤務する学校でも幼児児童生徒の学力向上や豊かな人格形成を目指し、校内外や個人研修の機会を積極的に設け日々研鑽を積んでいる。授業づくり、学習評価、教材作成、教育相談、保護者対応等、教師が身に付けなければならない知識やスキルは数多い。社会の変化とともに学校教育の在り方も更新されていく。令和の日本型学校教育を担う教師には、学び続けることが求められ、学校は学び続けることのできる資源の宝庫である。

三　チーム学校として一致協力し合える魅力

授業場面においては、対象者の実態や学習効果等を勘案したグループ編成によって指導を行うこともある。特別支援学校においては、様々な場面で先輩教師に学ぶ機会を得ることができるという利点があり、指導のノウハウを培うことができる。例えば、毎時間の授業に子供たちの興味・関心を引き付け、「分かる」授業を展開する力、授業を通して得た知識や技能の定着を図るための仕掛けなど、自身の引き出しを増やす機会にも恵まれている。十二年ぶりに改訂され令和四年に提示された生徒指導提要では、学校におけるチーム支援の大切さが説かれている。学校の強みは、なんと言っても教師同士の学び合いや支え合いが日常的に行われているところであろう。新任の教師は先輩教師から学び、先輩教師は後輩教師の手本となるための日々の修養がスキルアップにつながる。生徒指導上の問題が発生しても、チームで支援できる体制を整えやすいといった強みがある。担任は一人で問題を抱え込まず、ペアの教師、学部主事や生徒指導主任等と連携・協力し、チームで対応しやすくなる。

四　子供の育ちが教師の成長にもつながる魅力

県内の特別支援学校においては、複数の学部が設置されている利点を生かし、子供たちの乳幼児期から青年期までを切れ目なく支援することができる。就学から進路選択・決定まで、人生を左右するかけがえのない時期でもあることから、一人一人の将来に責任をもち、真剣に向き合っていくことができる教師を育てていきたい。子供の人間形成に深く関わることができる教職は、子供の成長・発達を実感できる喜びを味わうことができるとともに、教師自身も成長できる尊いものである。

五　おわりに

現在、他職種で活躍しながらも「未だに教職を諦めきれない」といった声を聞くことがある。こうした方々のためのペーパーティーチャー研修機関を設けることはできないだろうか。かごしま県教員等育成指標には、本県の教員等全てが身に付けておくべき五項目の資質が示され、これらは教員等の採用段階で概ね身に付けていることが求められることから、これらの指標を基に前向きにチャレンジしていただきたい。優れた教師の育成は子供の豊かな育ちへとつながり、子供の豊かな育ちが仕事へのやりがいや教師としての誇りにつながるものと考える。

わが校の

学校経営

あいさついっぱい　えがお満開で　未来をつかむ子供の育成

武岡台小（市）　榊　まゆみ

一　はじめに

本校は、鹿児島中央駅から北へ約三km、武岡団地北側の傾斜地に平成元年に開校し、創立三十五年を迎えた。武岡小学校の児童数増加に伴う分離開校のため、創立当時が児童数のピークで、年々減少し今年度は二百四十二人が在籍している。

校区は武岡四丁目から六丁目で、団地にある学校でありながら敷地面積は広く、「武岡台の森」と名付けられた広さ約一・四haの森を有している。生活科や総合的な学習の時間を通して、豊かな自然の中で児童は伸び伸びと活動している。

二　学校経営の基本方針

教育目標は、「輝く未来に夢を咲かせる武岡台の子の育成～人権尊重の精神を涵養し、自己肯定感を育む仲間づくり～」キャッチフレーズは「あいさついっぱい　えがお満開　武岡台」である。人権尊重や自己肯定感を育む活動を通して、非認知能力（学びに向う力・人間性等）を培い、分かる・できる授業づくりに努めることが、夢の実現につながるとの思いから学校運営に努めている。

三　本校の取組

㈠　自己肯定感を育む

互いのよさや違いを認め合う第一歩は、挨拶である。本校には、児童・教職員が相互に、そして、来校者へ、立ち止まって気持ちのいい挨拶を交わす「ワンストップあいさつ」の伝統がある。特に高学年はしっかりとした挨拶ができ、来校される方々に「挨拶が気持ちいいですね。」とお褒めの言葉をいただくこともしばしばである。今年度はこの「ワンストップあいさつ」をより進化させ、小・中九か年の継続を意識し、武岡中学校で取り組まれている3Dあいさつも取り入れている。また、各学級で帰りの会を中心に自分にはよいところがあることを実感させる「ほめ言葉シャワー」で、互いのよさや違いを認め合う場を設定し、その日のピカイチさんと紹介者両方を称賛している。

㈡　資質向上

今年度の校内研修は「非認知能力」を育むことをテーマとし、学習指導・生徒指導・保健指導・特別支援教育を四つの柱としてアプローチする。特に学習指導では、授業の中で身に付けさせたい力をめざす子供の姿「かがやく武岡台の子」として位置付けている。また、全ての教師が一人一授業を実施し、互いに授業を開き参観し合うことで、授業の質を高め、互いの資質向上に努めている。

㈢　森の活動

「武岡台の森」は、創立十周年を記念して整備された雑木林である。発達段階に応じ、生活科や総合的な学習の時間で、四季の会や森林インストラクターの方々に御協力いただきながら活動している。ネーチャーゲームやグリーンアドベンチャーでは、友達と協力しながら木々の名前や特徴などを学び、講師の方々に教えていただきながら木工教室、しいたけの駒打ちなどの体験活動を行っている。市街地の近くでありながら、豊かな自然が身近にある環境と多くの方々に支えられた学びに感謝している。

四　おわりに

創立十周年に建立された石碑に「夢咲け、輝く未来」の文字がある。当時の教職員・保護者・地域の方々の願いを受け継ぐためにも、教育目標とさせていただいた。子供自身が輝く未来をつかみ取れるウェルビーイングを目指して、今後も子供を中心に据え、自己肯定感・非認知能力の育成に職員一丸となり努めていきたい。

全ての生徒が夢や希望をもって登校し明日の期待に胸を膨らませて下校する学校

河頭中（市）　渕脇広智

一　はじめに

本校は、鹿児島市の北西部郊外に位置し、山間部の自然豊かな環境にある。校区の中央部を甲突川が貫流し、その流れに沿って国道三号線が南北に走っている。周辺には、かごしま健康の森公園や鹿児島市水道局河頭浄水場などがある。昭和二十二年に開校し、校訓「誠実・勉学・健康」を掲げ、創立七十七周年を迎えた。三十年前、平成五年八月六日の「八・六豪雨災害」では、校舎及び校区内の一部の地域が浸水するなど大被害を受けた。

現在、生徒数七十九名、職員数十六名、学級数五学級（特別支援学級二）の小規模校である。平成十七年度から鹿児島市の特認校制度の指定を受け、現在、十四名の生徒が校区外から通っている。

二　学校経営の基本方針

㈠　積極的な生徒指導

学校教育の基本を生徒指導と捉え、生徒会活動を核として、それぞれの生徒が達成感や感動のある学校行事等に取り組んでいい係る。学級集団の絆づくりより人間関係を構築するために教職員は、個々の生徒理解に努め、活動を通して積極的に関わる活ようにしている。平成十五年度から取り組んでいる伝統芸能エイサーは、総合的な学習の時間（夢南風）の取組の成果として、沖縄の大会や地域の行事等で勇壮な演舞を披露し、本校の伝統となっている。先輩から後輩へと二十一年間受け継がれ、主体的な生徒の活動として定着している。その他、生徒主体の教育活動を進めるためにキャリアパスポートを活用し、「目標→計画→実施→評価」を明確にして取り組ませることで自己肯定感、所属感等を高めている。

㈡　生きる力をはぐくむ学習指導

令和四年度から思考力・判断力・表現力の向上を目指した学習指導に取り組んでいる。具体的には、①学びの必然性のある課題の設定②思考・判断・表現するための学び合いや協働する活動の場の設定③振り返りシートの活用を全教科の意識的な取組とし、教科指導のスタンダードとしている。これに付随して生徒の対話的な活動や学び合いを支える姿勢づくりのための授業スタンダード、目的意識と見通しをもった家庭学習の取組のための家庭学習のスタンダードを設定し、取り組んでいる。このことは小中連携においても各小学校と共通理解を図り、教科部会で共通実践事項を設定するなどの連携を図っている。

㈢　気力・体力の向上

教科体育の充実を図るために授業前のランニング・筋トレ等の定着を図っている。また、生徒会保体部の主体的な取組の一環として長縄エイトマンやランニング等を行事に合わせて学年・学級で取り組んでいる。さらに、定期的にリラクゼーションタイムを設定し、筋弛緩法や呼吸法の実施により、心の安定を図るためのストレスマネジメントの定着に取り組んでいる。

㈣　特別支援教育の充実

本校は、特別な支援を要する生徒や特別な事情を抱えた生徒、不登校傾向にある生徒の割合が高いことから、校内支援体制づくりを実施し、個別に状況を確認する教育の充実を図ることが、共通実践討議した対応策は全職員で共通理解することが、日々成長するよう生徒の変化や状況をつねに職員で共有している。

㈤　地域とともにある学校

令和四年度から学校運営協議会を設置し、二年目になる。各校区から九名の委員の方々に依頼し、学校経営や運営状況等について御意見をいただいている。本校区は、三小学校区と一部の小学校区から成る。校区が広いため、各校区コミュニティ協議会等の委員としても積極的に協力している。地域での生徒の様子を伺ったり、学校行事等への協力要請を行ったりしている。また、地域行事への生徒の積極的な参加についてもお願いしたい。地域の夏祭りではエイサーを披露したり、運動会では運営の手伝いをしたりするなど高評価を得ている。郷土を愛し、地域に貢献する生徒を育成するために地域との連携を大切にしている。

三　おわりに

本年度、前任校長から引き継ぎ、手探りで学校経営を進めてきた。赴任してまず着手したのは、樹木の剪定や作業で花いっぱいの学校周辺の除草であった。自然豊かで永年愛されてきたのだなと感じた方々から、人が育つ学校は、地域からの期待に胸を膨らませて下校する学校を目指して微力ながら学校経営に尽力していきたい。

小規模校環境はとても大切だと思っている。生徒が多くの体験や密度の濃い経験をすることができるこの全ての生徒が夢や希望をもって登校し、明日の期待に胸を膨らませて下校する学校を目指して微力ながら学校経営に尽力していきたい。

不易と流行を肌で感じる 安房の子どもたち

安房小（熊）　淵田晋平

一　はじめに

本校の校区は永久保・船行・松峯・安房・春牧・平野の六つの区から成り立っており、本校児童数は、ここ数年二〇〇名前後の学校で通常の学級六学級、特別支援学級四学級、通級指導教室二教室で県費負担教職員一九人と屋久島町内では規模の大きい学校である。本校は屋久島の聖人「泊如竹（とまりじょちく）」の出身地でもあり、今もなお住民の心の中にその教えを尊ぶ精神が流れている。近年では、屋久島は世界自然遺産の島として豊かな自然環境に恵まれた環境の中で環境教育、屋久島型ＥＳＤ教育も進めつつ、学校教育目標である「夢や希望の実現を目指し自ら学び心豊かでたくましい安房の子の育成」をめざし日々学校経営に励んでいる。

二　学校教育目標を達成する基盤となる屋久島、安房の教育と実践

㈠　郷土の先人泊如竹翁の教えから

屋久島の安房で生まれた泊如竹は、京都や鹿児島で仏教や儒学の一つである朱子学などを学び、藩主である島津光久の侍講となった。その後屋久島に戻り、島の人々の生活向上に力を尽くし「屋久聖人」と言われ、特に「日々努力せよ」「他人に尽くせ」「計画を立てて実行せよ」の如竹翁の教えは今でも地域、学校でも受け継がれている。

㈡　本校の学校スローガン「人にやさしく物にやさしく命にやさしく」の実践から

本校のスローガンは校訓の「かしこく」「やさしく」「たくましく」に加え、平成九年、当時の本校職員と保護者が話し合い、素直でやさしい子どもを一緒になって育てようという願いを込め作られた。今でも、放送委員会の児童が毎朝全校児童向けに呼びかけ、実践している。実際に本校の児童はやさしい子どもが多く、いじめ問題も少なく、自分自身を大切に、また同じように友達も大切にできる心優しい子どもたちが育っている。

㈢　屋久島型ＥＳＤ教育に加えユネスコスクール登録へ

今年、屋久島は自然世界遺産登録三十周年を迎えた。屋久島町ではＳＤＧｓの先駆けとして一四年前からＥＳＤ（持続発展教育）を実践している。本校でも、屋久島から持続可能な社会の創り手となる子どもたちを育成するために、世界自然遺産や伝統文化等を素材にした学習を通して、『故郷屋久島への思い』を育みながら、『学び、考え、行動する力』と『自尊感情』を高め、『生きる力』を育成する教育を総合的な学習や各教科で展開している。また、このような実践から本年度、ユネスコスクールに認定され子どもたちの励みとなっている。

㈣　職員研修「授業参観ウィーク」の実施から

やはり、子どもが輝くのは日々の授業での学習の姿でありたい。そのために、本年度から職員研修として個人テーマを設定させ一人一参観授業「授業参観ウィーク」を十月に実施し、子どもの姿で相互に意見交換を行い授業改善を図っている。教師は授業で勝負。授業が充実すると子どもたちの瞳は輝いている。

三　おわりに

学力向上、確かな学力の定着は学校にとって一丁目一番地の重要な使命である。そのためにも、地域の文化や伝統のよさを生かし、時代を超えても変わらない価値を尊重しつつ、学校と家庭と地域が社会の変化に対応するために、特に学校では、子ども一人一人が夢や希望を実現する能力を育めるよう全教育活動で取り組んでいきたい。

そのためにも教師は授業で勝負。評価は子どもの輝く姿で。本校の実践はこれからだ。

「自律」「共感」「学び続ける」を合い言葉に

重富小（姶伊）　平　千　力

一　はじめに

本校は、姶良市南西部に位置し、平松城跡に「振業館」（島津家ゆかりの学校）を設立したのが始まりである。本年度、創立百三十五年目を迎える伝統校である。校区は鹿児島市のベッドタウンとして活気があり、児童数もここ五年間に約百人増加し、現在は、三十三学級、六百九十一人が在籍しており、来年は更に増加し、七百人を超える予定である。

このように、宅地造成が進んでいるが、歴史のある校区だけに、校区コミュニティも充実している。また、ＰＴＡも今の時代背景に沿った独自の方針を打ち出し、充実した活動を行っている。

児童、保護者、校区民、そして、教職員が共に、「ウェルビーイング」な学校をめざして様々な実践をしているところである。

二　特色ある教育活動

㈠　学校経営目標の共有

本校は、児童、教職員、保護者、地域に「ウェルビーイング学校」になるために、「自律」「共感」「学び続ける」を合い言葉に頑張りましょう、と言い続けている。

「自律」とは「自分事として捉えること」、「共感」とは「相手を承認し、心理的安全性を高めること」と意味付けている。

このことが如実に表れたのが九月に行われた運動会である。コロナ禍が明け、午後までの、入場制限なしでの開催となった。入場行進を復活させ、短距離走、リレー、団体種目等はもちろんであるが、全学年の「表現」、声を出しての「応援合戦」等、全ての児童が活躍できる場を設けた。九月初旬から始まった運動会練習。最初は、やらされ感満載の練習だった。児童の動きは鈍く、不平不満等もちらほら出ていた。練習が進むにつれ、どの学年も、当日までいろいろなドラマがあった。最後の週は、児童は、運動会を自分事として捉え、自分たちで考え動き、友達と共感し合い、一年生もが、自主的に動く練習となった。運動会当日、全ての競技・演技に会場からあふれんばかりの拍手が起こり、特に、六年生の表現、応援団の演舞には、涙混じりの感動の拍手が起こった。まさに、「自律」する力と、「共感」する心を培うことのできた運動会となった。

㈡　重富校区コミュニティとのタイアップ

本校区のコミュニティは非常に充実している。特筆したいのは、夏休み中に実施した「剣の平塾」である。この活動は、校区コミュニティ主催で、専門的な技に触れることや、校区を知ることで、児童の知的好奇心や故郷を思う心を育てることを目的に実施された。本年度は、十四講座実施され、希望者は六百七十人と、ほぼ全児童の申込みがあった。講座内容も多岐にわたり、例えば、世界的な料理家を講師に招いて実際に親子で和食を作る「和食を知ろう」、本市在住の画家を招いた「絵の宿題終わらせちゃおう」、重富海岸での野外活動「ユニバーサルビーチって何だろう」など、バラエティに富んだ内容となっている。

児童は、本物に触れ、体験し、自分の意外な一面を認識するとともに、学びの楽しさを実感している。学校だけの学びでなく、地域の大人が協力して学びの場を与えてくれる貴重な機会となっている。なお、本活動は、全て校区コミュニティが企画・運営している。

三　おわりに

重富小の児童は、常に学び続け、自分が重富小の歴史をつくるという気概をもって学校生活を送れるようにしていきたい。現在、それに近い形になりつつある。次年度は、さらに「自律し、共感の心をもって」「学び続ける」ことができるように「総合的な学習の時間」を一新し、探究学習「重富学」（仮称）を展開する予定である。

心に残る ひとこと

いざ鎌倉、いざ学校なんだよ

本城小(市) 牧　住　幸　二

昔、二十代の頃の自分を育てていただいた「吉田」の地に舞い戻っている。「恩送り」の気持ちを胸に、子どもたちを前にすると、「今日は何を話そうか。」と胸が熱くなる。コロナ禍を乗り越えて、夢に向かって諦めない気持ち、相手を思う優しさなど、伝えたいことは山ほどある。

では、自分自身にとって心に残る運命の一言と言えば、はるか三十五年前の新任の時に先輩が伝えてくれた言葉を思い出す。

期待を胸に勤め始めた日置市の職場、昭和の香り漂う木造校舎、純朴な子どもたちとの出会い。無鉄砲ながらも突っ走った時代であった。現在とは違う穏やかな時間の流れ、雰囲気が漂っていた。その中で先輩たちに恵まれて、自由に楽しく教師生活をスタートさせた。

何をしても許されていた時代。子どもたちと深く関わり合いながら過ごしていた。一学期が終わり、ほっとして過ごしていた夏休み、普段は優しい先輩から強く叱られたことがあった。それは、台風が襲来をした翌日、休みだったので家でゆっくりしていたら、先輩から電話が来た。

「何をしているんだ。出て来い、学校に。」慌てて学校に行くと強く叱られたことを思い出す。

「こういう時は真っ先に学校に駆けつけるもんだよ。いざ鎌倉、いざ学校なんだよ。」

「ご苦労様です。大丈夫ですか。」という一言が言える教師になりなさいという教え。

衝撃の一言だった。古き時代の時代錯誤な言葉なのかもしれない。学校のことを大切に思う気持ちが芽生え始めるきっかけとなった。

それからである。自分の中で何かが変わったのは。職場でも遠慮せずに前に出るようになった。相手を気遣う一言が自然と言えるようになった。職場の中にチームという意識が芽生えてきたのは。

あれから三十五年、現在の職場でも職員に対して、「リスペクトする関係づくりと言葉の大切さ」が自分自身の礎にもなっている。

Good は Great の敵である

桜山小(南) 内　薗　博　之

この言葉は、ある講演会で教えていただいた言葉で、忘れないうちに校長室のいつも目にするところに掲示した。その意味は、「そこそこ良い状態であると、そのことに満足して向上心がなくなり、せっかくGreatになるチャンスがあるにもかかわらず、Goodな状態で終わってしまう。このGoodとGreatの差が一人前と一流の差なのである。自己実現とは「なれる最高の自分になること」であり、最高の自分になろうとしないことは、本人にとっても会社にとってももったいない」ということである。「世界最高の経営思想家」と言われるジム・コリンズ氏の言葉だ。

「会社」を「学校」に置き換え、いろいろなことを考えさせられた。職員にも「良い先生から偉大な先生に、良い学校から偉大な学校へと飛躍しよう」と話すようにしている。コロナ禍を経て、学校もいろいろな改革が必要となってきた。常に最高の学校を目指して、職員と知恵を出し合い、汗をかき学校運営に取り組んでいきたい。

この本には、Greatな会社になるためにリーダーとしてすべき三つのことが挙げられている。一つめは、「規律のとれた「正しい」人を配置すること」学校で言えば、「力のある『ミドルリーダー』を育てること」であろうか。二つめは、「核となる価値観を共有すること」、「実践的な学校経営案と具体策を全職員で共通理解すること」であろうか。三つめは、「愚直に実行し続けること」、「長期的な見通しを持って、丁寧に教育活動に取り組むこと」であろう。

最後に、本著の中に「自分の言動の背景に私心はないか?」という言葉がある。リーダーは、自分の言動は組織やチームのための貢献であるべきで、そこに自分だけ利することを目指すような指針があってはいけません。「経営の神様」と言われ、昨年亡くなった稲盛和夫氏も「動機善なりや、私心なかりしか」と同様の言葉を残している。学校運営においても、何か決断するとき、何か行動するとき、「これは学校のためなのか?子供たちのためになるのか?」自分に問いながら答えを出していきたい。「動機が善であり、私心がなければ結果は問う必要はありません。必ず成功するのです」という、稲盛氏の言葉を胸に、学校運営に取り組んでいきたい。

いつぃも今日のぐとぅに

あらちたぼれ

名音小(大) 桑　鶴　直　幸

今日(ぐぅ)ぬ誇らしぃや
いつよりも勝り
いつぃも今日(ぐぅ)のぐとぅに
あらちたぼれ

これは、名音集落の八月踊りで最初に歌われる歌「ミッシャ」の一節である。「今日の誇らしさはいつよりも勝っている。いつも今日のような日でありますように。」という意味で、秋の豊かな恵みに感謝し、一年間の豊穣を祈る人々の願いが込められていると集落の方から教えていただいた。本校に赴任した年、運動会の閉会式であいさつされた方が、この歌詞を引用し、盛会を祝うスピーチをされたことがたいへん印象的で、その時から私の心に強く残っている。

御存じのとおり、八月踊りは奄美の各集落で

長年親しまれている踊りである。しかし、この八月踊りの歌は口承で伝えられるため、歌える方が高齢になるなど、八月歌の歌い手が年々少なくなっていることが本村でも課題となっている。名音集落でも途絶える寸前の時期があったが、地域の有志が名音八月踊り保存会を立ち上げ、今では活発に伝承活動が行われている。本校では、保存会の方をお招きし、歌や踊り、チヂンの叩き方などを指導していただいている。保存会の御指導のおかげで、子供たちだけでチヂンを叩き、歌い、踊れるようになっており、そのことは本校の特色となっている。

コロナ禍が明け、今年は四年ぶりに八月踊りを踊る地域行事が行われるようになった。本校に赴任して三年目の私にとって、初めての経験である。集落民が一堂に集い、チヂンを叩き、指笛を鳴らしながら笑顔で八月踊りを踊る輪の中にいると、何とも言えない幸せな気持ちになる。この八月踊りを通して、自然の恵みや人々に感謝する心を育てるとともに、名音集落の宝である八月踊りをいつまでも大切にしようとする子供たちを育てていきたいと思う。

「不易」と「流行」

赤木名中(大) 肥後孝幸

今年度、「奄美群島日本復帰七十周年」の節目を迎えた奄美大島へ赴任した。奄美市立赤木名中学校の素直で元気なあいさつをする生徒に毎日活力をもらっている。

そのような中、着任式で転入者代表あいさつをする機会をいただいた。あいさつ文を考えるに当たり市教育委員会及び諸先輩方に助言を仰ぎ、また、市の教育行政の重点施策を何度も読み直した。そうするうちに昔、父が何度も言っていた言葉にたどり着いた。「不易」と「流行」である。

父は常に「先人を敬う心」「宗教心」を大切にしなさいと言っている。ここで言う「宗教心」とは、先祖に対する畏敬の念である。我が家では朝夕、必ず神棚に頭を下げ、感謝の気持ちや報告をご先祖様にしている。

また、前年踏襲だけでは人は動かない。相手が違い、時代が変われば、その状況に応じた対応の変化を求められる。大切なことは、何が本質かを見極め、判断し、決断・実行すること。だからこそ教育は変わってはいけないものと変わっていかなければならないことの見極めが大切。そこには「思い」があるかないかだ。このようなことを実家に帰るたびに、父と杯を交わしながら今も話をしている。

奄美市教育委員会基本方針の「地域に根ざしたふるさと教育」～あまみの子どもたちを光に～を具現化するために、この「不易」と「流行」を意識し、実践することが求められていると感じた。そのためには私たちが地域を知ること、体験すること、何より好きになること。今年度の本校の生徒会役員改選に伴う立会演説では、「ふるさとの文化を守り、伝統を繋いでいきたい。」と訴えた候補者が複数名いた。コロナ禍で様々な行動の制約を受けたこの世代だからこそ、古きを守るために、新しい知恵と力を身に付け、よりよい方法を模索してくれるであろう。

この子どもたちが将来、どこにいても赤木名(ふるさと)に貢献できる人になっていると確信している。

ある日の校長講話

校歌への思い

上手小(北) 米　丸　寛　之

令和五年八月十四日、上手夏祭りが本校で開催されました。この夏祭りは、本年度末での閉校にあたり、子供たちに楽しい思い出を作ってあげたいという思いからＰＴＡ有志が立ち上がり、多くの方々から御協力をいただいて実現しました。当日は、予想を上回る大勢の方々が参加されて、会場中が笑顔に包まれ、心の中にいつまでも残る最高の夏祭りとなりました。その夏祭り後半には、皆さんや保護者などが舞台に上がり、参加者と一緒に校歌を歌う場面がありましたが、どの人も恥ずかしがらず高らかに歌う姿には、本校を心から愛する思いを感じました。

校歌は、川田国男さんの作詞、武田恵喜秀さんの作曲によって完成されました。完成時期や歌詞の「四海」など確かな意味を知ることはできていませんが、私なりに歌詞の思いを考えてみました。一番は、自然豊かで大切な故郷である地域に、誰もが待ち望んだ学校ができたことへの喜びを感じることができます。二番は、互いを認め合い、協力しながら、強く、真っ直ぐに生きていこうという、人権尊重の理念をもって生きることの大切さを感じることができます。三番は、これまで築き上げられてきた学校や地域の伝統に誇りをもち、受け継いでいきながら、全員の力で学校や地域を盛り上げて新たな道を切り拓いていこうという、現在学校で学んでいる者としての生きがいや、卒業後の新たな人生の一歩を踏み出す勇気や希望を与えてくれていると感じることができます。

校歌は、建学の精神や理想とする校風を表したもので、学校の一員であることの自覚を高めたり、全員で歌うことで一体感や連帯感、学校に対する誇りを感じたりするものです。学校で各行事や式典で歌うのはそのためですが、夏祭りの参加者による校歌の大合唱は、校歌の醍醐味や、校歌を歌うことによって人がいつまでもつながっていることのすばらしさを感じた、まさにその瞬間でした。

閉校まで残り約半年、校歌を学校で歌う機会もわずかとなってきました。歌詞に込められた願いや思い、本校への誇りを感じながら、皆さんの校歌を最後まで大切に歌い継いでいきましょう。

太陽のような温かい言葉かけを

溝辺小(姶伊) 林　　賢　介

四月の始業式で皆さんにお願いした四つのことを覚えていますか。（一～四は省略）

さて、今日はその中の「友達の嫌がることを言わない・しない」ということについて考えてみましょう。新学期が始まって一か月が経ちました。楽しいこともあったと思いますが、楽しいことだけでなく、嫌なこともあったと思います。皆さんに質問しますので、心の中で「ある、ある」「ない、ない」と答えてください。

□　友達や先生から「上手にできたね」と褒

められたことがある。

□　友達や先生から「えらいね」「やさしいね」と褒められたことがある。

□　友達や先生から「すごいね」と褒められたことがある。

どうですか。このような言葉をかけられると嬉しいですよね。そして、よし、また頑張ろうという気持ちになりますよね。

（北風と太陽の話省略）

友達と仲良くなるために必要なことは、お日さまのような暖かさ、つまりお友達の思いやり、やさしい言葉ではないでしょうか。

百八人全員が楽しく明るい学校生活を過ごすためには、お友達や先生の温かい心、やさしい言葉が大切だと思います。太陽のような温かい心・やさしい言葉・行動、それが「友達の嫌がることを言わない・しない」ということなんです。

人を傷つけてしまうような言葉・行動を決してしてはいけません。そのようなときは、普段は優しい先生方も厳しく指導します。

言われた人・された人の心が温かくなるような言葉かけ・行動をするように心がけていきましょう。

見方・考え方を変えて
いまを生きる

大隅中（隅）馬込　昇

一昨日までゴールデンウィークでした。皆さんはどんな休日を過ごしましたか。私は昨年同様に校長住宅の生け垣を剪定しました。去年はそのかなりの数の樹木がキンモクセイであることも分からないまま、ただきれいに整えるという思いだけでやりました。しかし今年は違いました。

この一年間、台風などの強い風から家を守ってくれました。そして秋には素晴らしい香りの花をたくさん咲かせて楽しませてくれました。そんな思いもあったので、感謝の気持ちを込めて、そして、これはここに住んでいる自分の責務であると感じながら、生い茂った枝葉の剪定をしました。不思議ですが、なぜか、昨年とは疲れの質が違う気がしました。

ところで皆さんは、「汝、何のためにそこにありや」という言葉を知っていますか。少し古い言い回しですが、この「汝、何のためにそこにありや」、いったいどんな意味でしょう。となりの人と話してみてください（しばらく対話させ二～三名に答えてもらった）。この言葉は「あなたは何のためにそこにいるのですか」という意味の、生き方に対する問いかけで、ある高校の校長先生が生徒たちに何度も話していた言葉だそうです。「いついかなるときにも、誰に問われても、すぐにはっきり断言のできる毎日の生活であってほしい」との思いから、繰り返し生徒たちに問いかけたそうです。

「自分はなぜここにいるのか。そしてこれからどこに行き、何をしたいのか。」はっきりとした目的と意識をもって自分の人生に立ち向かっていくことはとても大事なことです。

昨年と同じキンモクセイですが、私自身の見方・感じ方が変わったことで、向き合い方が変わりました。人間は自分の周りで起きていることへの向き合い方を変えることで、生活や人生への意識が変わるのではないでしょうか。

「汝、何のためにそこにありや」と、自分自身に問いながら生きてみましょう。

話のひろば

教職は面白い

兼久小（大）
仮屋　浩一

新任の頃、町の陸上記録会の打ち上げで町内の同世代の教員とわいわいと話をしていたことを思い出す。たわいもない話から教育に関する真剣な話までいつまでも話題は尽きなかった。その中で詩の授業の話になったことがあった。ほろ酔いの中で授業での教師の問いについておのおの意見を聴き合った。「この詩の中の私とはどのような人物か。」「このときの私の気持ちとは。」など意見の交流の中、ある先生が「僕はこの詩の中にどのような色があるかを問う。」と言った。五感から詩を観るという方法に新鮮さと面白さを感じ取った私たちは「それなら匂いは？」「私の目線はどこか。」など話は一気に広がっていった。

今自分の学校はこのような場はあるだろうかと振り返ってみる。社会では教員の働き方改革への関心も高く、私は管理者として仕事の効率化と長時間勤務の解消に一生懸命である。学校で教材研究を同僚と共にじっくりとやりたいと思う職員に「早く帰ってゆっくりしなさい。」と言い職員の教職への熱意まで削いでしまってはいないだろうか、また効率化の結果、職員が孤独感を深めていないだろうかと不安になる。

どのような職場でも最も大切なのはコミュニケーションである。高い給与をもらっていても人間関係に悩み、離職する若者も多いと聞く。本校では今年度、提案事項や相談案件は担当から主任に相談をする縦の繋がりを重要視している。これは主任のリーダー性を育成し、教職員同士の繋がりを深め職員の孤立感を減少させることもねらいとしている。また、指導案検討もチームを組んで行っている。そしていずれも一定の決定権と責任をリーダーに与えている。組織力を生かした業務改善策としては細やかな取組であるが、職員同士の対話は増えてきている。さらに教職員一人一人が自分の考えを学校運営に生かせると認識できる現場になれば、仕事への熱意と自信も向上するのではないかと考える。私は新採時代、教職の面白さを感じる機会をいただいた。今後も教職の面白さが分かり元気が出てくる教職員の育成に尽力したいと思う。

一通の手紙から膨らむ思い

霧島中（姶伊）
伊地知　勇

六月初旬に、小・中併設校である前任の四年生児童から一通の手紙が届いた。

溢れる喜びと共に開封すると、「かき氷がおいしい季節になりました。校長先生お元気ですか。わたしは元気です。」で始まる手紙に、全校児童六名の集合写真の余白に、かき氷などの貼り絵が糊付けされた心温まるもう一枚が添えられていた。彼らの声が今にも聞こえてきそうな一枚である。

初めて小学生と過ごした三年間は、とても新鮮で貴重な学びの連続だった。早速、お礼を兼ねて担任の先生へ連絡をとると、国語の学習の一環だということが分かった。授業の様子なども想像しながら読み返しているうちに、感謝の気持ちと更なる成長を願う気持ちが絡まるように湧き出てきた。その児童が私を選んでくれたことに加え、数々の私との思い出が綴られていたことも、他には代えがたい喜びである。

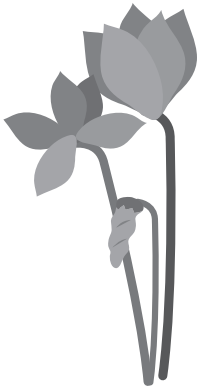
三年前、私と同時に赴任したその担任は、偶然にも私が三十代のときの教え子でもある。しかも、観の転換を図りながらミドルリーダーとしての資質を着実に備えてきている。遠隔合同授業を軌道に乗せた功績は特に素晴らしかった。そのため、珠玉の二枚を手にしながら子供

たちの様子を聞いているうちに、私の様々な感慨深い思いは、更に大きく膨らんでいった。

ところで、全国的に教員不足や管理職不足が深刻になっている中、人材確保のために国を挙げて様々な工夫や改善が加速度的に進められていることは、非常にありがたいと感じている。本県においても、独自の『秘策』の効果に期待がかかる一方で、今もなお英知を結集した策が練られていると察する。

それらを後押しするように、教職の魅力を実感と共に発信している多種多様な投稿なども、ますます頻繁に見られるようになった。『教師冥利に尽きる』経験を広く伝えていくことも大変有効である。

しかし一方で、現場に身を置く我々自身が生き生きとした姿で働くことが大きな鍵を握る。これら自明の理を職場の中でしっかりと共有し、職員一人一人が同僚性を高めながら生き生きと働くことができる職場環境づくりに、大変微力ではあるが、引き続き努めていきたい。一通の手紙の重みと教え子の成長に応えるためにも。



海の魅力とどこでも授業

鹿児島水産高
福島　聡

鹿児島水産高校では「いつでも・どこでも・誰にでも」をモットーに『どこでも授業』を展開しています。多い年は千五百名ほどにもなる対象者は保育園児から高齢者までと様々で、話し方や内容にも工夫が必要です。当初は担当職員による授業が中心でしたが、近年は生徒主体でも展開されるようになりました。生徒にとっても大変な取組ではありますが、人に分かりやすく伝える難しさを学ぶ貴重な経験となっています。

この授業を展開する中でよく取り上げてきたのが珍しい海の生き物です。一例を紹介すると、「皆さんはタコブネという生き物を知っていますか？名前からイメージするとタコが船に乗ってプカプカと海を漂っている情景が浮かびます。これは貝殻をもつタコのことです。」というような導入をします。この「タコブネ」は初対面で緊張している子どもたちを一気に引き付けるアイテムとしてとても有効です。まずは授業に興味を持ってもらうことが一番で、そこから海の生き物の不思議な生態や面白さ、そして海の環境を守ることの大切さなど、海の魅力を存分に使って話を進めます。

人を引き付けるための工夫は、その講義への興味度に大きく影響し、楽しく進んだり、つまらなかったり、いかに対象者にインパクトを与えるかは大切です。さらにこの取組はその後の進路選択にも影響することがあり、高校に入学してきた生徒が「あの時のどこでも授業の話で、海や生き物、そして水産に興味を持ったので受験しました。」という声を聞くと、『どこでも授業』を展開してきた苦労が報われます。

さて、「タコブネ」と呼ばれる生き物、私がサンプルで持っているものは「アオイガイ」という種類のものです。残念ながら生きて泳いでいる姿を見たことはありませんが、錦江湾内の海岸でその殻を採集したものです。この殻を二つ合わせるとハート型、それを三つ合わせると徳川家の葵のご紋に見えます。そこから名前が付いたと言われています（諸説あります）。身近な海にこんな不思議な生き物がいるのも、かごしまの海の魅力です。

読書案内

■オリバー・バークマン　著
高橋璃子　訳

限りある時間の使い方

花田小(日)　曽　山　志　保

「NYタイムズ、WSJ絶賛の全米ベストセラー」というポップの文字に、思わず手に取った本だった。「限りある時間の使い方」という題名に対して「時間と戦っても勝ち目はない」という帯に「どういうことだろう。」と興味が湧いた。

筆者は、これまでタイムマネジメントを駆使して、人生の全てをコントロールしたいと考え生活を送っていたし、「生産性」とか「効率性」の観点からの書物も数多く執筆していた。私も時間は有効に使いたいと考えている。

ところが、著者は「時間を区切って計画的に生活しようとしても、常に計画がうまくいくかどうかを心配し、効率ばかりを考え、心休む暇はなくなる。一日は二十四時間しかないにもかかわらず、自分の力量の有無に関わらず『やることリスト』と題して、次から次に仕事を詰め込んでいく。仕事をこなせなければ、自分自身を責め、もっと頑張らねばと焦りだけにとらわれ続けていく。時間を有効に使おうと思うこと自体、無理なことである。」と述べている。自分自身の生活に疑問をもち、たどり着いた答えだ。確かに、私も今日やる全てのことを時間を区切って計画し実行しようとするも、うまくいった例しがない。思うように進まないから、「時間がない。」とか「時間に追われている。」とか感じていたのかも知れない。さらに「やるべきことはいつだって多すぎるし、これから先もそれはきっと変わらない。その中で心の自由を得るための唯一の道は『全部できる』という幻想を手放し、一握りの重要な事だけに集中することだ。」という言葉も印象的だった。スケジュール管理だけに囚われ、「今」を見失ってはいないか。時間には限りがあることと「今」という瞬間が積み重なって未来があることを忘れてはいけない。著者の言葉の重みを感じた。これまでの人生観を一考する一冊となった。

かんき出版　一七〇〇円＋税

■ジェニファー・アーカー／
ナオミ・バグドナス　著
神崎朗子　訳

ユーモアは最強の武器である

垂水小(隅)　北　川　政　人

ユーモアは人と人との有意義なつながりを育み、創造力を解き放ち、緊張した状況においてもストレスを和らげる効果があるという。そして、そのような組織文化がある職場は、困難な状況をしなやかに乗り越えることができ、パフォーマンスが向上するという。

これまで出会ってきた先輩方の中には、ユーモアにあふれ、職員室でも教室でも、まわりの人を楽しい気分にさせ、仕事でも確かな成果を

あげる素晴らしい先生方がいた。仕事も遊びも全力であり、そして、その学校では、何よりも楽しい職員室文化が花開いていた。

本書によれば、ユーモアを駆使する親しみやすい上司の場合、従業員の意欲は三割も高くなり、さらに、上司に対して仕事以外のことも気軽に話せる従業員は、上司に対して仕事以外のことを話せない従業員に比べて仕事に対する意欲が七倍も高いそうだ。また、このようなリーダーであれば、従業員が気軽に相談でき、事態の悪化を避けられるという。ユーモアのセンスに自信はないが、職場における意欲向上と危機管理のために、ユーモアの導入を急ぎたい。笑える瞬間をめざとく見つけ、この職場のあちらこちらからユーモアが湧いてくるような状況を自ら率先して作り出していくことが、リーダーシップ戦略の一つであるなんて、なんだか楽しい。

また、リーダーが自分の失敗を笑い話にすることは、自分の心理状態をコントロールするツールとなるだけでなく、まわりの人たちも安心して失敗を認めやすくなる。もちろん四六時中ふざけているわけにもいかないので、真面目さと陽気さの絶妙なバランスが大切であることは間違いない。メリハリをつけて、緩急をつけて、今日も楽しく陽気にいこう。

東洋経済新報社　一九八〇円

■林　修　著

いつやるか？今でしょ！

高尾野中（北）湊　川　　彰

教育界にあっては、百五十年ぶりの大改革と言われるほどの転換期を迎えています。

このような中にあって、私たちは何をすべきかと考えているとき、昔読んだ本が目に止まり、改めて頁を捲っていると、「教育のプロである我々が分かりやすい授業をするのはあまりにも当然のこと。にもかかわらず、それが目標になっているのではないか。授業時間よりもずっと長い生徒の日常時間に、勉強しようという思いを掻き立てることこそが、我々の真の仕事ではないでしょうか。」という文章にハッとしたところです。これからの時代、課題解決につながる新たな価値や行動を生み出すなどの資質・能力が求められていますが、その原動力となる主体性を身に付けさせていくことが重要なことだと思います。

改めて授業は終点ではなく、日常の飛躍に向けての踏切板にせねばならないと、教育のあり方について考えさせられたところです。

人が変われるとしたら、変わらなければならないと気付いた瞬間以外はないものです。問題点に気付くことで物事の本質が見え始め能率向上や組織の改善等の原動力となるのです。日々学校経営の充実に向けて、悪戦苦闘していますが、時間を見つけて本を読むことで打開していく上での、あるいは成長していく上でのヒントが得られるものだと感じたところです。林修氏の著書は、約二〇年前に出版されたものですが、今を考えるコラムや自分を見直すタイミングなど、元気に日常に飛び出していくヒントが多く掲載されており、今でも役に立つ、私にとって大切な一冊となっています。

宝島社　一二〇〇円

趣味・文芸

その時々を楽しんでいます。

隼人工業高　竹元美徳

大学時代の趣味はバイクで、アルバイトで稼いだお金を全てバイクとバイク用品につぎ込んだ。教員となって、通常は車で通勤していたが、季候が良い日に二、三回バイクで出勤したら当時の教頭に呼び出され、「乗ってくるな。」と注意を受けた。その後、しばらくはバイクに乗っていたが、事故や違反のリスクを考え、乗ることが遠退いてしまって、一年ぐらい経ってバイクを手放した。

それから数年後結婚し、家族写真を撮るために一眼レフカメラを買った。二校目の赴任先が奄美大島で、自然豊かな風景の良い写真が撮れた。妻の妊娠にあわせて、ビデオカメラも購入し、産まれて来る子供の映像を撮る日を楽しみにしていた。いよいよ出産と連絡を受け、私はカメラとビデオカメラの両方を首にぶら下げて、病院に駆けつけた。このとき撮った、へその緒で繋がった状態で妻に渡された、親子の初対面の写真がとてもきれいに撮れて、これまでの人生で一番の写真である。

子供が産まれてからは、子供の写真を撮ることや撮影したビデオの編集に多くの時間を割いて、それらが趣味となった。

奄美から鹿児島市に異動し、数年後に中古住宅を購入した。中古だったこともあり、洗面所のリフォームとして、洗面化粧台の取り替えと壁紙の張り替えを行った。さらに、数年後は二階にある洋室の床の張り替えをし、和室六畳二部屋を洋室にリフォームした。恐らくこの頃の趣味を聞かれたら「家のこそくり」と答えただろう。

農業科のある学校に勤務してからは、生徒が作った野菜の苗を購入し、単身赴任の教職員住宅で自動散水装置を付けて、ミニトマトやピーマン等をプランター栽培した。特にスイカのツルをベランダに這わせ、大きくなるのを楽しみに過ごした。このことがきっかけでその後も毎年同じ学校の苗を買って、野菜とスイカを自宅で栽培することが小さな趣味になっている。

最近の新たな楽しみといえば、息子が小さい時にからくり時計に夢中になったため、気がつけば七個のからくり時計がある。二十年以上経つため、動かなくなったり、音が鳴らなくなったりしたものもある。そのまま放置していたが、今度は孫（娘の子供）が自宅にやってきて、色々なスイッチを押したがるようになり、何故かからくり時計に夢中になってしまった。壊れたからくり時計はスイッチを押しても反応がない。しかし、一日に何回も押している姿を見て、分解して修理したいと思うようになった。メーカーに問合わせして部品を購入し、部品がない場合でも代用品に交換して修理した。ある日、孫がいつものとおり反応がないつもりでスイッチを押すと、時計の文字盤が割れて動き出し、驚いた孫は慌てて隠れた。その姿が予想どおりの反応で、とても嬉しかった。これが趣味なのかはわからないが、壊れたおもちゃ等の修理を楽しみながらやっている。

今年かごしま総文祭があり、昨年から写真部門の会長として、全国から応募された生徒の写真を鑑賞する機会が多くあった。また、写真家の方々との交流や生徒の作品の審査会等に参加し、写真の素晴らしさを感じることとなった。かつて、フイルム式の一眼レフカメラで撮影し、シャッターを切った瞬間に、きっと良い写真が撮れたはずと現像ができるまで楽しみにしていたことを思い出した。その後デジタルカメラが発売されるようになり、画素数が少ないことや、写真がネガから電子データになりパソコンで画像修正ができることなどから、写真に対する熱が冷めてしまった。

現在はスマートフォンで簡単に写真を撮れて不自由はないと思っていたが、総文祭でキャノンやニコンのカメラメーカーのブースが設けられており、のぞいてみた。生徒が参加する写真家の解説付きの撮影会では、カメラやレンズの貸し出しがあり、良い写真を撮ろうと思ったらある程度のカメラが必要だと触発されてしまった。定年近くになり、記念にまたカメラを買って、動けるときに旅先の写真や家族写真を撮って楽しみたいと思っているところである。

郷土の紹介

ガラッパと金鉱石のふるさと

菱刈中（姶伊）大　田　恭一郎

一　はじめに

「いさは♪とってーも　いいーさ♩」で始まる伊佐市歌は、平成二十五年の伊佐市制五周年記念式典で完成披露された。当時の伊佐市教委学校教育課勤務とあわせて、私自身の伊佐市への赴任は二回目である。

菱刈中学校を訪れて、まず驚くのは正門前のカッパ像である。高さ約五メートルでグラスファイバー製の像で、左手には金鉱石、右手には以前は「ひしかり町」ののぼりを持っていたが、今はのぼりを取り外しているため、ピースサインをしているようにも見える。愛きょう溢れる表情は、中学生くらいの子どものカッパに見え、たいへん親しみを感じる。

二　伊佐市の概要

本市は、宮崎県・熊本県の県境に位置する、県本土最北の市で、周囲を九州山地に囲まれた盆地を形成しており、平地の中央部を川内川とその支流が流れ、広大な水田がひらけている。面積は三九二・五六平方キロメートルで、寒さが厳しく平成二十八年には鹿児島県観測史上初のマイナス十五・六℃を記録した。

大口地方は、古くから牛屎院、牛山院と呼ばれていたが、永禄十二年（一五六九年）に新納忠元が大口地頭となった前後の頃から大口と言われている。

菱刈地方は、歴史書「続日本紀」の中で「天平勝宝七年（七五五年）大隅国菱刈郡が創設された」との記述があり、本城・馬越・湯之尾・曽木をもって太良院と言われていた。

歴史的にも一つの地域であり、川内川流域に広がる県内屈指の水田地帯として発展してきた旧大口市・旧菱刈町が、平成二十年十一月一日の合併により「伊佐市」として新たな歴史をスタートさせた。

三　ガラッパのはなし

さて、「菱刈中前のカッパ像の名前は？」の疑問をもったところから、今回の取材は始まった。すぐに答えが見つかると思っていたが、これが難航を極めた。菱刈図書館や市のＰＲ課などに問い合わせたが、関係資料は残っていないとの回答であった。

人づてに、カッパをデザインしたという卒業生の話を聞くと、中学生の時、五人の同窓生と共に美術の先生の家に泊まり込み、動きのある子どものスケッチを提出した。このスケッチを元につくられたのがガラッパ公園の三十四体のカッパ像ではないか、とのことであった。つまり、菱刈中のカッパ像とは関係なかったらしい。さらに情報が集まり、「ひしかりガラッパ王国」の当時の大統領にも話を聞くと、どうやらカッパ像には名前はないというのが結論であったようだ。

そこで、「カッパ像命名プロジェクト」を立ち上げ、生徒に愛称を募集した。

本校では二十一年ぶりの「文化祭」を十一月七日に開催する。この文化祭で、カッパ像の愛称を決定する予定である。

四　金鉱石のはなし

カッパ像がもっている金鉱石は菱刈の重要な産業の一つである。菱刈鉱山の金の産出量は、平成九年に四百年で八十三トン算出した佐渡金山を抜き日本一になった。更に算出を続け、現在、四十年で二六〇トンを算出している。また金鉱石の品質も世界平均の約十倍の含有率であり、世界一の金品位である。

五　おわりに

川内川に育まれた、菱刈の地で、かごしま国体のカヌー競技が行われ、本校からも四人の生徒が出場した。これからも、ガラッパのごとく水に親しみ、自らを鍛え、金鉱石のように世界一の輝きで、周りを魅了する菱刈中の生徒であって欲しいと思う。

Challenge!

勇気を出して踏み出せば
その一歩が後々の進展を
飛躍させ可能性を広げる
ことになる。

早春の仙巌園　©K.P.V.B

提供「僕の贈りもの　日めくりカレンダー」
松山　武史　氏

一般財県校長会館だより

○　十二月十日は、県医師会館大ホールにて、校長会館主催の教育講演会を開催します。御来場をお待ちしています。

〔事務局より〕

○　十一月十日は、四年ぶりに県小・中学校長研究大会が開催されました。全体会・講演・分科会を通して、熱心な研修が行われました。多くの先生方から、やっぱり顔と顔を合わせて意見を交換できるのはいいねとの声も聞かれました。

来年度は、十一月の第三金曜日の十五日に開催します。教育課程編成の際は、このことを念頭に置き、学校行事等をこの週に組まないようにお願いします。

季節の言葉「霜月（しもつき）」

霜月や　すかれすかれの　草の花　正岡子規

霜月や　日ごとにうとき　菊畑　高浜虚子

編集後記

十一月に入り、植物に寒肥を与える時季になりました。寒肥は、春の成長期に効き目を現す肥料となります。寒肥の与え方次第で、樹木の成長や果実の収穫にも大きな差が現れます。各学校では、子供たちの成長を願い、植物に寒肥を与えるように様々な視点から愛情を注がれていることと思います。

先日、リーディングドラマの公演を見る機会がありました。リーディングドラマは、朗読劇とは異なり、役者が舞台上を歩いたり、体を動かしたりもしますが、基本的には台本に向かってテキストを読んでいるのを見せるスタイルです。豪華な衣装や大がかりな舞台装置はなく、その日も舞台上には、一つの長椅子しかありませんでした。公演が始まって間もなく、ドラマの世界に引き込まれました。俳優二人の舞台でしたが、複数の登場人物を演じ分け、臨場感のある役者の表現力に感動しました。新採の頃、先輩の先生に「教師は子供たちの前では、役者でなければならない」と教わりました。現在の自分自身は、子供たちや教職員に感動を与えられる存在なのかと自省することでした。

十一月号をお届けします。今回も先生方の豊富な経験と見識から、多くのことを学ばせていただきました。御多用の中、玉稿をお寄せいただいた執筆者の皆様に心からお礼申し上げます。

益満裕美（星峯中学校）